

第4回 食事

食事に関する規制も厳しい。とくにバラモンは禁酒、菜食主義をとおしている。当然他のカーストと同食することはないし、ビールの回し飲みなんてありえない話である。我々のアシスタントを務めてくれたバラモンの兄弟と食事をするときはつらかった。ベジタリアンのレストランへ連れて行かれるからである。ニワトリとか卵カレーが食べたいのに、ダル（豆）カレーで我慢しなければならなかったからである。しかし、彼らとの生活に慣れてきたある時、私は、ノンベジのレストランへバジュパイ兄弟を連れていき、彼らが厳格な菜食主義を守っている家の一員であることを知りつつも、卵、やぎ、鶏の肉を食べさせた。兄プラモッドは卵まで、弟ビノッドはすべてを食べた。相手の文化を破壊したことになる。こんなことをしていいのだろうか、いまだに後悔の念にかられている。

また、ある時南インドのタミール大学のA教授宅の晩餐に招かれ、大学からお抱えの車で教授宅に出向いたことがある。我々の食事がお終わった後、運転手さんの番になったが、彼は低いカーストであったため部屋の中に入れてもらえず、玄関先の地面に座らされた。その目の前にお嬢さんがカレーの皿を、まるで犬にえさをあげるように、無造作に置いた。我々と共食とはいかないまでも、せめて同じテーブルでと思ったが、そうはならなかった。ロンドン帰りのさばけた先生とその家庭かと思ったが、郷里に帰るとカーストの壁が破れないままであった。

ある時マドラスから長距離列車にのった。途中、駅弁売りの叔父さんにカーストを聞いてみた。どうせ低いカーストだろうと思っていたが、バラモンという。不特定多数の人が乗る列車で食べ物を売るときに、もし売り手が低いカーストだったら高いカーストの人は買わないからであろうか。また、ホテルの調理人もウエイターも高カーストが多かった。カルカッタから列車にのった時、チャイ売りのおじさんから一杯5円でチャイを求めたことがある。素焼きのかわらけがコップであった。飲み終わって返すと、受け取らない。他の人のしぐさを見ていると、みな使用済みのかわらけを、窓から外に放り投げていないか。1回きりの使い捨てで大地に返していたのである。タミール大学の食堂でカレーを注文したら、最初に出てきたのが食器代わりのバナナの葉っぱであった。使い終わったのは外に捨てられ、それは犬やカラスが処理してくれる。誰が使ったか分からないような食器を何回も、なんて耐えられないのであろうか。なるほどと思うインド人の清潔感がそこにあった。

さて、厳格なカースト社会にあって、バラモンは不可触民と全く共食しないのか、というのが私の疑問であった。いいかえれば私のインド調査は、その謎を解くための旅であったと言い換えてもよからう。次の二つの事例で、その答えが見つかったような気がする。

①先ほどタミール大学教授宅の話をしたように、原則としては共食しない。しかし、私のアシスタントの従兄弟の若奥さん（バラモン）が亡くなり、その初七日に近在の異カースト（不可触民を含む）が数十人集められてなんと共食の宴がはられたのである。喪主を含めたバラモンがけなげに食事の接待をしているのではないか（写真6。12月29日の日記）。

日常生活でお互いに避けあっているばかりでなく、むしろ助け合って相互依存しているが故にこうした場が、それはハレの日に限られるとはいえ、もうけられているのであろう。結婚式の日、不可触民が食事のサービスを受けている風景もよく目にした。

②インド村民の食材はほとんど定期市で求められる。もしバラモンが野菜を市場に求めにいった、汚れないカーストの売り手の野菜が売り切れてしまっていた場合、バラモンははたして不可触民の野菜売りから買うのだろうか。答えは、イエスであった（写真7）。



写真6 異なるカースト達の共食

初七日の夜、不可触民を含む村民に食事をふるまう喪主らバラモン。



写真7 不可触民からニンニクを買うバラモン

サンディラ地区、ゴニの定期市にて。売り手のカーストはチャマール。